

一般財団法人 語学教育研究所主催 2026 年度講習会のご案内

授業づくりワークショップ（略号：W1～W10）【対面】

対面開催・20名限定！実習を通して達人講師が授業づくりのコツを丁寧に教えます。

パーマー賞受賞者に学ぶ極意（略号：P1～P8）【オンライン（OL）】または【対面】

卓越した授業力を持つ受賞者の理念と実践から、より良い英語授業へのヒントが得られます。

ア・ラ・カルト講座（略号：A1～A17）【オンライン（OL）】または【対面】

経験豊富な講師による様々なテーマのセミナー、ワークショップです。

対面かオンラインかをご確認の上、お申し込みください。

対面の会場：語研オフィス（〒116-0013 東京都荒川区西日暮里6丁目36番13号サザンパレス西日暮里102）

申込み：語研ウェブサイト <https://www.irlt.or.jp/>

「講習会」から各回のフォームに必要な事項を入力しお申し込みください。

参加費：会員 3,000 円 非会員 5,000 円（年度初期費用 2,000 円）* 学生各半額年度 初期費用 500 円

講座内容詳細（日程順）

①P1【OL】「英語らしい」発音の基本ーリズムと音連結を中心にー 5月10日（日）10:00～12:00

講師：小菅 和也（武蔵野大学 名誉教授・1993年度パーマー賞受賞）

英語の発音にはいくつかの要素がありますが、この講座では、「英語らしさ」に非常に重要な「リズム（強弱）と音連結」を中心に取り上げます。日本語と異なり、英語の音声は強弱の差が非常に大きいこと、単語を越えて音がつながることが、大きな特徴です。発音を学ぶ上でまた指導する上で、これらは見逃されがちです。具体的な練習材料を、整理してたくさん提示します。生徒・児童にできるだけ質の高い音声インプットを与えられるように、まずは教師自身の発音を確認しましょう。関連して、個々の音素（あいまい母音や/n/など）にも触れる予定です。また、英語発音や発音指導に関して、日ごろの疑問点など質問も受けたいと思います。

②P2【OL】高校：論理・表現の授業 5月17日（日）10:00～12:00

講師：矢田 理世（筑波大学附属高等学校・2019年度パーマー賞受賞）

昨年度勤務校で公開した「論理・表現 I」の授業を1時間分ご覧いただきます。これを材料に、論理と表現の両方を扱う授業構成と指導技術などについて考えます。「論理・表現」は文法演習の時間と読み替えられることの多い科目ですが、気持ちや考えを英語で表現する活動、さらには論理性を含めて表現する活動を授業に取り入れられるように、具体的な活動例や指導方法を提案します。

③A1【対面】歌で指導する音素と音節 ～リスニング穴埋めを超えて～ 5月31日（日）14:00～16:00

講師：静 哲人（大東文化大学 名誉教授）

英語の歌は（文法その他もですが特に）発音の最高の教材ですが、単に YouTube を流して「歌ってみましょう」は無理ゲーです。音声変化等も豊富ですし、音符の数が歌詞の音節の数と対応するため不要な母音挿入なしで発音せざるを得ません。そこであなたの肉声による「橋渡し」指導が重要になります。講師は中学・高校教員時代から40年間ほぼ全ての英語授業で歌を取り入れ、大学で教える今は90分間／1年間歌うだけの授業も持っています。40年かけてたどり着いた（笑）MS-Word上で可能な歌詞マークアップ（音素の色づけ、リンキング、非開放閉鎖音、帯気音、脱落の記号付け）法と授業手法を紹介し、受講者を生徒に見立てて実際に「歌わせる」指導もしてみます。曲はテッパンの You Belong With Me / Taylor Swift を予定。楽しみましょう！

④A2 【OL】 音声を大切にすることってどういうこと？

6月14日（日） 10:00～12:00

講師：粕谷 恭子（東京学芸大学）

「英語教育において音声は大切ですか？」と聞かれたら、たぶんほとんどの方が「はい」と答えることでしょう。では、音声を大切にすることとは具体的にどういうことなのでしょう。授業の中で、語彙指導や文法指導と同じエネルギーを音声指導に注ぎ込んでいるのでしょうか。音声がないがしろにされない指導のあり方について、具体例を挙げながら一緒に考えたいと思います。小学校での事例が多くなりますが、中学校の先生方にもご活用いただけたらと考えています。キーワードは「意味が音を出す」です。文字が音を出すことに慣れておられる方のご参加をお待ちしています。

⑤A3 【OL】 コミュニケーション活動を楽しく ～英語を「学ぶ」から「使う」へ～

講師：及川 賢（埼玉大学）

6月20日（土） 17:00～19:00

英語を身につけるには、文法や語彙を「学ぶ」と、実際に「使う」経験の両方が不可欠です。しかし、日本では英語を使う機会が限られているため、学習者が意識的に使用する場を増やす必要があります。特に学校の授業では、英語を使ったやりとりや活動を積極的に取り入れ、実践的な学習環境を作ることが重要です。これは学習指導要領の方針とも一致し、生徒の英語活用力を育むことを目的としています。本講演では、授業での具体的なコミュニケーション活動例を紹介し、生徒が積極的に参加できる環境作りの工夫についても触れます。実践的なアイデアを提供し、英語教育の現場で役立つ内容をお届けしたいと考えています。

⑥A4 【OL】 論理・表現の授業での表現活動

6月27日（土） 17:00～19:00

講師：杉内 光成（早稲田大学本庄高等学院）

本講習では、「論理・表現」の授業における表現活動の充実を目的に、既存教材の効果的な再構成方法を紹介いたします。具体的には、教科書に掲載されているリスニング活動やライティング活動をスピーキング活動へと発展させる手法、またスピーキング活動をライティングへと転換する際の指導の工夫について扱います。さらに、文法問題を単なる知識確認にとどめず、実際の言語使用を促す表現活動へと展開する方法も提案していきます。これらを通して、生徒の発信力を高める実践的な授業づくりを考えていきたいです。

⑦A5 【OL】 多様な生徒を抱える公立中学での英語で進める英語の授業

講師：木村 祐太（石川県金沢市立西南部中学校） 7月5日（日） 10:00～12:00

多様な背景や学力層の生徒が在籍する公立中学校で、英語で進める英語の授業を無理なく成立させるための、やさしく実践的な授業内の仕組みづくりをご紹介します。学力差や一人ひとりの特性に配慮しながら、誰もが安心して参加できる環境を整える工夫、理解を助けるインプット、取り組みやすい活動設計、負担を抑えたアウトプット、日々の評価と声かけのポイントを取り上げます。教科書編集や指導書執筆の視点も交え、現場で取り入れやすい具体例を共有します。

⑧A6 【OL】 語の意味

7月20日（月祝） 13:00～15:00

講師：砂谷 恒夫（東洋学園大学 非常勤講師）

語の意味とは何でしょうか。訳語？指示物？概念？語の意味はどう示せばよいのでしょうか。日本語訳？実物・写真・絵？動画・動作？英語による言い換え？具体例の列挙？あるいは、文脈に沿った例文提示？語源・語形成の説明？本講座では語の意味について考え、その示し方の長所、短所について具体的に検討します。語の多義や日英語の意味範囲の違いについても触れます。意味とはモノではなく捉え方です。意味には階層があります。同じ物や光景を見ても、思い浮かべる言葉は人によって異なりえます。写真よりも略画や図の方がわかりやすいこともあります。夏の初めのひと時、語の意味について一緒に考えましょう。

⑨W1【対面】【中】中学校英語指導の基本的考え方と実践 7月25日(土) 14:00~16:00

講師：小菅 敦子（元東京学芸大学附属世田谷中学校教諭・1997年度パーマー賞受賞）

中学校の英語指導において、「導入から言語活動までの一連の指導」について、1時間の授業を想定してお話しいたします。教室という限られた場面で、いかに生徒と必然的な英語でのやり取りをしながら新教材を導入するのか、そして最後はそれを生徒のリアルな世界で使ってもらえるのか、具体的に提示いたします。Oral Introduction、ペアワーク、即興的なやり取りを促進するための段階的指導、リテリング、Show & Tell、テキストの内容をさらに発展させる発表等です。また、ライティングへつなげる指導についても触れたいと思います。

⑩A7【OL】言語活動をより豊かにするためのタスクの視点 7月26日(日) 10:00~12:00

講師：高杉 達也（筑波大学附属中学校・2025年度外国語教育研究賞受賞）

英語の授業では、言語活動を通じて児童・生徒の資質・能力を育成することが不可欠です。しかし、その英語授業の中核を担う言語活動は、適切に実施され、かつ楽しく豊かなものになっているのでしょうか。言語活動をより良いものにするために有効なのが、タスク中心教授法（Task-based language teaching, TBLT）における「タスク」の考え方です。本講座では、言語活動に対する理解を深めるとともに、このタスクの要素を生かしながら、言語活動をより豊かにしていく方法を一緒に考えます。

⑪W2【対面】【小】子ども達とやり取りしながら進める授業—低中学年の授業づくり

8月1日(土) 10:00~12:00

講師：仲光 直子（青梅市立河辺小学校）・松原 木乃実（聖マリア小学校）

本ワークショップでは、低学年と中学年の子どもたちにどのような英語の学習経験をさせたいか考えていきたいと思います。現行学習指導要領のもと、外国語、外国語活動が必修となり3年生から英語を学んでいますが、1・2年生で楽しく身体ごと英語に触れることで、中学年以降の学びが豊かなものとなることが期待できるのではないのでしょうか。実際に、学期に何回か、或いは時間割に組み入れて毎週授業を行っている学校もあります。低学年や中学年の子どもたちの発達段階や学習能力に寄り添った、思わず参加してしまえるような活動をご一緒に試しながら、それぞれの段階での英語授業のあり方・培いたい力について考えていきましょう。

**⑫W3【対面】【小】子ども達とやり取りしながら進める授業—低中学年の授業で活用できる歌や
ライム・絵本など** 8月1日(土) 13:00~15:00

講師：川副 理美（田園調布雙葉小学校） 町田 協子（東洋英和女学院小学部）
渡辺 麻美子（明星学園小学校）

歌やライムは、英語の音声・リズムの習得に欠かせない教材の一つです。歌やライムを通して様々な語彙や表現に触れることもできます。低学年、中学年で扱いたい歌やライムとはどのようなものなのでしょうか。どんな音声（音源）を聞かせ、どんなふう導入したらよいでしょう。教室での子ども様子なども話題にしつつ、ご一緒に試してみましょ。また、低学年・中学年で活用したい絵本も取り上げて絵本の読み聞かせについてもご一緒に考えたいと思います。

⑬A8【対面】授業における「音読」の意義・方法を問い直す 8月5日(火) 14:00~16:00

講師：久保野 雅史（神奈川大学）

「音読」は英語の授業で当たり前のように行われる活動です。しかし残念ながら、英語の文や語句の意味・構造が十分に理解できていない状態で音読練習を繰り返すような授業に出会うことがあります。一文ごとに交替しての音読、スピードを上げての音読など、音読活動の多様なバリエーションを目にしますが、文章の意味が音声に反映されておらず、聞いても意味が頭に入らない音読になりがちです。音読から話すことにつながる活動として Read-and-Look-up もよく行われますが、目的や手順の理解が不十分なままで行われている場合があります。当たり前のように行われている活動の意義を見直し、構造・意味が伝わる音声表現力を教員自身が身につけるための演習を行います。

⑭A9 【OL】 リテリングから対話へ—段階的に育てる英語のやり取りと形成的評価

講師：福島 玲枝（畿央大学）

8月7日（金）10:00～12:00

本講習会では、教科書のリテリング活動を出発点に、発話を「発表」から「やり取り」へと段階的に発展させる授業設計を検討します。当日は、①導入からリテリングまでの構造設計、②リテリングを対話へ拡張する段階モデル、③形成的評価を通じた自由なやり取りの育成、の3点から、リテリングをやり取りへ接続する中間段階として再設計します。また、実践事例をもとに、日々の授業に落とし込む手順と留意点を整理します。

⑮A10 【OL】 スローラーナーの指導法について—高校と大学の実践に基づいて

オーラル・イントロダクションとリプロダクション活動へのチャレンジ

講師：江原 一浩（高崎経済大学）

8月10日（日）10:00～12:00

英語が嫌い、英語が不得意、英語の教師が苦手と様々な理由で英語学習に身が入らずやる気が失っている学習者や、やる気はあるが英語学習が上手く進まない学習者をどのように指導して、自己肯定感や達成感を覚えさせてきたのか、その経験と指導法を共有したいと思います。指導の肝となるのが「音声」を中心とした活動。音声変化を学ぶ帯活動、教科書の導入活動のオーラル・イントロダクション、そして、まとめ活動のリプロダクション+1を柱として展開する授業を紹介したいと思います。また、学習環境の創造についても触れます。

⑯A11 【OL】 「深い学び」につながる活動とは—教材研究の視点 8月22日（土）13:00～15:00

講師：若原 保彦（秋田大学）

平成29・30年の学習指導要領の改訂において、「主体的・対話的で深い学び」が新たなキーワードとして示されました。本講義では、このうち外国語科において特に実施が難しいと考えられる「深い学び」に焦点を当てます。「深い学び」とは何か、それが求められるようになった背景は何か、また、どのような活動が「深い学び」につながるのか、さらに、それらの活動を授業の中でいつ、どの程度の頻度で行うべきかといった点について、若林俊輔先生の教材研究を手がかりとして紹介・検討します。

⑰W4 【対面】 【中】 中学校英語における「話すこと」の再設計—活動・評価・テストをどうつなぐか—

講師：鈴木 文也（高崎健康福祉大学）

8月29日（土）14:00～16:00

本講座では、中学校英語における「話すこと」の指導を、活動・評価・テストの連関という視点から再検討します。講師自身の授業映像や音声を具体的な素材として用い、話す活動が暗唱や形式的なやり取りにとどまらず、生徒の思考・判断・表現を伴うものとなるための条件を分析します。さらに、学力差のある学級における活動の設計や支援の在り方、パフォーマンス評価およびテストへの接続について具体的に検討し、授業づくりの視点を共有します。

⑱W5 【対面】 【小】 子ども達とやり取りしながら進める授業—中高学年の授業づくり

8月30日（日）10:00～12:00

講師：相田 眞喜子（田園調布雙葉小学校・東京学芸大学）

石田 裕子（品川区小学校英語専科指導員）永井 淳子（田園調布雙葉小学校他）

3・4年生で日本語とは異なる英語の音への感度を高め、聞き取って分かったことをつなげて推測しながら聞き、なんとか応じようとするたくましさを育てておくと、5・6年生になっても日本語で解説して分からせる授業ではなく、英語を聞かせて気づかせる授業を積み重ねていくことができます。聞き続ける力、気づく力、伝えようとする力を養う語りかけとはどのようなものでしょうか。日々向き合っている子どもたちとのエピソードを共有し、参加者のみなさまと実際に活動を試してみながら授業の進め方をご一緒に考えたいと思います。

**①9W6 【対面】 【小】 子ども達とやり取りしながら進める授業—中高学年の授業で活用できる歌や
ライム・絵本など** **8月30日（日）13:00～15:00**

講師：相田 眞喜子（田園調布雙葉小学校他） 石田 裕子（品川区小学校英語専科指導員）
永井 淳子（田園調布雙葉小学校他） 町田 協子（東洋英和女学院小学部）

歌やライムは、英語の音声・リズムの習得に欠かせない教材の一つで、歌やライムを通して様々な語彙や表現に触れることもできます。また絵本を語り聞かせ、その内容についてやり取りを行うことで、子どもたちの“だんだん分かってきた” “いつのまにか英語を言えるようになった”という経験を増やしていくことができます。中学年・高学年の授業で活用できる歌やライム・絵本には、どのようなものがあるでしょうか。ご一緒に試してみながら、その効用や留意点について考えてみたいと思います。

②0P3 【対面】 Teacher Talk を磨こう～生徒の思考と発話を促す「待つ・問う・支える」技術～

講師：津久井 貴之（群馬大学・2011年度パーマー賞受賞） **9月6日（日）14:00～16:00**

Teacher Talk を磨くとは、教師が上手に話すことではなく、生徒が考え、話したくなる「問」と働きかけをつくることです。本講座では、英語の先生が授業中に英語を使うことについて、「先生も昔は自分たちと同じで英語が今みたいにはできなかったと思うので、自分たちが英語を学びやすくなるような授業を行うことができると思う。」と答えた生徒の声を手がかりに、教師に寄せられたこの期待にどう応えるかを考えます。Oral Introduction、問い返し、待つ姿勢、必要な日本語支援の入れ方を具体的に見直ししながら、教師がどの瞬間に支え、どの瞬間に待つべきかを検討します。思考を止めない Teacher Talk のあり方を、参加者とともに探ります。

②1A12 【OL】 生きる力を育てる英語の授業

9月13日（日）13:00～15:00

講師：望月 正道（麗澤大学）

幼稚園から高等学校までのすべての学習指導要領で育成が求められる生きる力をつける英語の授業を考えます。なぜ生きる力を育成する必要があるのか。生きる力とはなにか。生きる力を構成する3つの要素をどのように育成するのかについて考えます。知識・技能の育成についてはよく知られていると思いますが、その理論的裏付けについても考えます。思考力・判断力・表現力の育成についてもさまざまな試みがなされていますが、その能力が身につけているかの評価方法についても考えます。英語授業でどのように主体的協働的な深い学びを身につけさせるかについて、参加者のみなさんと考えたいと思います。

②2P4 【OL】 生成 AI を活用した英語指導の今 ～AI literacy と教師の役割を再設計する～

講師：津久井 貴之（群馬大学・2011年度パーマー賞受賞） **9月26日（土）17:00～19:00**

生成 AI の時代に必要なのは、使うか使わないかの二項対立ではなく、学習者が何のために、どのように使うのかを判断できる AI literacy です。本講座では、英語力の伸長や自律的な学びの促進、そして教師の役割の再設計を視野に入れながら、AI を活用した英語指導の現在地を共有します。AI は本当に生徒の学びの「支援」になっているのでしょうか。個別学習は「最適化」されているのでしょうか。学習者の agency を損なわずに活用するための視点を、授業・単元デザインと教師の役割の両面から考えます。

②3A13 【対面】 テスト作りは苦しくておもしろい：CEFR-J の Can Do からテストを作る

10月4日（日）14:00～16:00

講師：根岸 雅史（東京外国語大学世界言語社会教育センター）

「テスト作りは苦しくておもしろい」というのは、私が毎日思っていることです。私は、CEFR-J の Can-do を基に作られたテストを日々チェックし、問題のある項目についてはその改訂案を作成者に提示しています。テスト作成に関わる CEFR (-J) の基本概念として、social agent と action-oriented approach があります。そのため、テストでは文脈や受験者の役割を設定し、その文脈におけるオーセンティックなタスクを作成する必要があります。これは大変な作業ですが、よい文脈やタスクを思いついたときは「やったー」という気持ちになります。皆さんも、この体験をぜひ一緒に味わってみませんか。

②4W7【対面】【高】リテリングをゴールにしたオーラル・イントロダクション

講師：山崎 勝（埼玉県立和光国際高等学校） 11月3日（火祝）14:00～16:00

授業のゴールをリテリングにした場合に、リテリングで生徒に言わせたい文章から逆算して授業の冒頭のオーラル・イントロダクションを作る方法をご紹介します。受講者の皆さんにも、教科書教材をもとに、オーラル・イントロダクションを作っていただき、教師役と生徒役に分かれて、実演の練習をしてみましょう。併せて、板書計画や視覚教具の使い方、効果的な口頭練習のさせ方についても考えてみましょう。普段の授業でお使いになっている「英語コミュニケーション」の教科書をご持参ください。

②5W8【対面】【高】「論理・表現」～文法中心の授業でも発表活動へつなげたい～

講師：浅野 伸子（東京都立駒場高等学校） 12月20日（日）14:00～16:00

多くの高校で使われている「論理・表現」の教科書は文法項目ごとに編集されています。各レッスンの初めに該当の文法項目を織り込んだ文章が示されていても、それを内容的に掘り下げ、発展させるような表現活動はほとんど行われていないのではないのでしょうか。与えられた日本語の文を英語にすることだけが授業目標にならないように、自分の考えを表現することを盛り込んだ授業実践を紹介합니다。

②6A14【OL】フォニックス活用法—英単語の綴りの教えかた。 12月26日（土）10:00～12:00

講師：手島 良（武蔵高等学校中学校）

英語の綴りと発音の間にある規則を適切に指導したいものです。ただ、その規則はかなり複雑で、一度教えれば身につくというものではありません。日々の授業の中で、（生徒に「またかあ～」と思わずに）しつこく何度もその規則に触れさせていくことが重要です。規則が定着するだけでなく、生徒が綴りを覚える負担が減り、発音も向上する—そんな良いことだらけ（？）の指導法をご紹介します。

**②7P5【OL】音読、リテリングから自己表現につなげる授業づくりと英語力を高めるテストづくり
2月21日（日）10:00～12:00**

講師：松下 信之（大阪府教育庁教育振興室高等学校課・2014年度パーマー賞受賞）

表現の能力（「話すこと」「書くこと」）に焦点を当て、音読やリテリングの活動を通して、高校生が即興で自分の言葉を用いて英語でコミュニケーションできるようにするための指導の進め方について、発表者が高等学校で行った実践を踏まえて提案します。さらに、生徒の学習意欲を高め、テストを受けることが英語力の向上につながるよう工夫した定期テストやパフォーマンステストの具体的な実施方法、ならびに評価方法についても提案します。

②8A15【OL】学習者の多様性に対応するための英語授業でのICT活用術 2月23日（火祝）

講師：草間 浩一（武蔵高等学校中学校） 10:00～12:00

「GIGAスクール構想の実現へ」（文部科学省2020）には「多様な子供たちを誰一人取り残すことなく、公正に個別最適化され、資質・能力が一層確実に育成できる教育ICT環境を実現する」ことを目指すと記されています。実際にどんな物を使い、どんなことができるのかを、実践例を通じて考えたいと思っています。合わせて学習者の多様性を測る方法や、多様性に応じた支援方法などにも言及します。特定のICT環境に依存しない、アナログであっても応用できる内容にしたいと考えています。

②9W9【対面】【高】オーラルイントロダクション はじめの一步 2月28日（日）14:00～16:00

講師：千田 享（埼玉県立浦和西高等学校）

新年度から英語による授業の実施を考えている方、またはすでに実践しているものの、より効果的な指導方法を模索している方向けのワークショップです。英語で授業を行う上で核となる Oral Introduction はなぜ行うのか、どんな効果があるのかについて考えます。その上で Oral Introduction の構成の方法と実施のポイントについて具体的に扱います。実際の授業場面を想定しながら、どのように導入を組み立て、生徒の理解や発話を促していくか、実践的に学びます。英語による授業に不安を感じている方にも安心してご参加いただけるようさまざまなヒントを提供します。

③0P6 【OL】 私の英語授業（1）**3月5日（金）19:00～21:00**

講師：吉澤 孝幸（秋田大学・2018年度パーマー賞受賞）

授業を通して生徒や参観者にどのようなメッセージを発信するか、そのメッセージを生み出すまでのプロセスや、授業そのものをどのような視点で組み立てていったのかについて、実際の授業映像を通して説明します。さらに、授業の活動を支えるための生徒に取り組みさせたトレーニングなどもご紹介します。また、自分自身の経験の流れに沿って、その時々でどこに軸足を置いて授業を構成してきたかについても話題にする予定です。さらに、授業と理論研究との往還という視点から私見をもとに提案を行います。

③1W10 【対面】 【中】 英語でのやり取りを通した文法の導入から教科書を活用した言語活動まで講師：栖原 昂（筑波大学附属中学校） **3月21日（土）14:00～16:00**

中学校の授業では、新出文法事項と教科書本文の内容の両方を適切に導入し、実際のコミュニケーションにおいて活用できるようにすることが大切です。今回は、特にイメージを持ちにくい文法事項の導入場面について、自然な英語でのやり取りを通して導入する方法を一緒に考えます。また、導入した文法事項を活用する機会として、教科書本文の内容を活かした言語活動を考えます。導入や活動の具体例をできる限りお示ししながら、参加された方も実際の導入や活動を考える時間も作れればと思います。

③2A16 【OL】 授業を生かすテストづくり**3月22日（月祝）10:00～12:00**

講師：山本 智恵子（白百合学園中学高等学校）

どのようなテストを作りたいのかを考えることは、どのような英語力をもった生徒を育てたいのか、すなわち、どのような授業を目指すのかを考えることそのものだと言えます。本講座では、中学・高校における定期テストづくりの過程とその実例を中心に、小テストやパフォーマンステストの実例も取り上げながら、授業での指導の実際を併せてご紹介します。新年度を前に、テストと授業の相互作用の効果を高めるための取り組みについて、参加者の皆様とともに考えたいと思っています。

③3P7 【OL】 英語授業の"あるある"を見直す—改善すべき点はどこにあるか**3月27日（土）15:00～17:00**

講師：向後 秀明（敬愛大学・2007年度パーマー賞受賞）

文部科学省の英語教育実施状況調査では、CEFR A1 レベル相当以上の中学生、A2 レベル相当以上の高校生がいずれも 50%以上になり、平成 23 年度初回調査の中学生 25.5%、高校生 30.4%と比べると隔世の感があります。しかし、実際の授業を見たり子供たちとやり取りをしたりする中で、この結果と現実とのギャップを感じるものが少なくありません。日本全体として英語教育は本当に改善してきているのか（或いは、そのスピードが遅すぎるといったことはないか）、もしそうでないとするれば、何をどう見直す必要があるのか。そういったことを、特に当然のことと捉えられている指導観やルーティン化している活動に焦点を当てながら、皆様とともに考えていきたいと思っています。

③4A17 【OL】 年度初めの初回での声掛けや授業のルール作り**3月28日（日）10:00～12:00**

講師：曾根 典夫（筑波大学附属高等学校）

本講習会では、初回の授業を教員の自己紹介や授業説明だけで終わらせたくないとお考えの方、また、どのような実践ができるのかを模索されている方のご参加を歓迎いたします。その鍵となるのが、「黄金の〇日間」の活用です。今のご自身の実践に何を加えることができるのかを、皆様と一緒に考えていければと思います。いくつかの選択肢から、ご自身に取り入れやすいもの、やってみたいと思えるものを、講師の具体的な実践例をもとに紹介いたします。

※P8 【OL】 （仮）筑波大学附属中学校の英語教育**日程・内容 検討中**

講師：筑波大附属中学校英語科（2024年度パーマー賞（学校賞）受賞）